# モニュメントで次世代へ

**拝啓　沖縄県議会**
**議員の皆さま**

小橋川　茂

私は、立法院を保存し再生させるために、街づくりや子供たちの社会環境づくりの立場から活動してきました。現在、残念ながら立法院議会棟の解体工事が進められています。その解体の現場を見つめながら私の胸の中で想起されるのは、立法院棟の建築空間の素晴らしさや歴史的意義の重要性ではなく、次のような印象的なエピソードです。

それは、目の不自由な子供たちが、社会科の郊外授業で先生に引率されて、立法院議会棟を見学にこられたときの話です。

子供たちは、先生から復帰前に立法院が果たした役割や、任命主席とは異なり住民の直接選挙で選ばれた議員先生方の活動について説明を受け、その後一人ひとりが議会棟の壁面や柱に触れて感触を確かめておりました。

子供たちは、直接に壁面や柱に触れることで、立法院の建物や歴史的意義についてのイメージを膨らませているようでした。立法院に触れた子供たちの豊かな表情を見ていると、その貴重な体験を私自身もその場で一緒に共有できたことに感銘を受け、胸が熱くなったことが思い出されます。

その情景を思い出すたび、立法院問題に対する立場や考え方の違い、手順などのさまざまな要因などは、些細（ささい）な事柄のようにさえ思われてきます。

ただ私たち大人は、この子供たちの手から、歴史に触れる機会を奪い取るという、何とも悲しむべきことを行っているのではないかとの自省の念だけが浮かんできます。そのような思いだけに突き動かされて最後の願いを込め県議会議員の先生方に、次のご提案を申し上げる次第です。

県当局は、解体撤去後の跡地利用計画の中で、その場所の一角にモニュメントを建立すると表明しております。

立法院玄関の丸柱は、建物を支える柱として、あるいは建物そのものを特徴づける一つの要素として、長い間人々の記憶に残るべく位置に存在していました。その柱は、立法院という場の歴史をしっかりと受け止める重要な役割を果たしてきたのです。その丸柱は、下の方が細く上の方に行くほど太くなっており、当時としては珍しい楕（だ）円形状の美しいプロポーションを誇っております。

それを設計した故大城竜太郎氏は、上方に伸びて太くなっていく形状の丸柱に、これからの沖縄の繁栄と自立の願いを込めたと言われています。

その玄関の丸柱については、先の盲学校の生徒たちも、大きさもちょうど手ごろだということもあって、何度も直接に手で触れ自らの感触で確認してイメージを広げておりました。

その子供たちの豊かな表情やしぐさに接してみると、実物に触れることで時間や空間、そして場所の雰囲気を感じることが、いかに大切かということが分かってまいります。さらに今日の街づくりの中では、その建物の一部を使い、モニュメントに活用することは歴史を次の世代に継承する点で、重要な意義を持っていると言われています。

以上の点をご検討いただき、県議会議員の先生方から県当局へ、立法院玄関の丸柱を現在の場所で、実物モニュメントとして生かす方策を進言していただけますようお願い申し上げます。（那覇市首里金城町一ノ三三、建築家＝投稿）